

## 学位論文審査結果の要旨

氏名	山本 英一
審査委員	主査 泉谷 裕則 副査 檜垣 實男 副査 津田 孝治 副査 山田 耕治 副査 松原 裕子

論文名 5歳以上の年長児発症の川崎病の臨床的検討  
審査結果の要旨

### 審査論文発表の要旨

#### <はじめに>

川崎病は、乳幼児に発生する全身の血管炎で、いまだ原因不明である。日本においては、年間約1万人の患者が発生し、年々増加傾向にある。川崎病の発症年齢は、多くが5歳未満で1歳がピークである。急性期におこる冠動脈病変が問題になり、約10%の川崎病患者が冠動脈の拡大や瘤に発展する。一方、5歳以上の年長児の発症頻度は川崎病全体の約12%と少ない。年長児の発症例は臨床症状、治療反応性などにおいて5歳未満の発症と異なる経過をとることが多く、心血管合併症発生の危険因子であるといわれている。今回の研究では、単一施設で集積した川崎病年長発症例における臨床像、治療経過、後遺症の発生について検討しその特徴を明らかにした。

#### <方法>

2008年から2014年の間に愛媛県立中央病院にて川崎病と診断され入院した200名の患児を後方視的に検討した。年長児群(5歳以上で発症した症例)(n=21)と対照群(5歳未満で発症した症例)(n=179)について、臨床症状、重症度、検査所見、治療、心冠動脈合併症について比較検討を行った。

#### <結果>

川崎病の主要症状である6項目の発現率は、年長児群と対照群で有意差は認められなかった。一方、川崎病の診断の参考項目ではあるが比較的特異な所見であるBCGの接種部位の発赤・腫脹に関しては、対照群と比較して年長児群では全く認められなかった。主要項目が4項目以下の不全型の症例数においても、両群に有意差は認められなかった。特徴的な所見として、年長児群の33%が初期診断として頸部リンパ節炎として診断されており、対照群(4.2%)に比べて有意に高かった。また年長児群において、川崎病と診断するまでの期間は、対照群に比べて有意差はないも

の遅い傾向にあり、 $\gamma$ グロブリン投与開始日は、わずかであるが有意に遅延しており、診断がより困難であることを示していると思われる。ただし、2つの群において、冠動脈病変の発生率には有意差は認められなかった。

#### <結語>

年長児における抗菌剤不応の頸部リンパ節炎症例では川崎病の可能性を念頭に置き診療を行う必要がある。また今回の検討では有意差がなかったが、年長児の川崎病発症例は冠動脈病変のハイリスクであり、できるだけ早期に川崎病と診断し2g/kgの大量 $\gamma$ グロブリン投与することで冠動脈病変の発生を予防できると思われた。

#### 審査会のまとめ

本論文の公開審査会は、平成28年12月5日に開催された。山本英一氏による研究発表の後、主査、副査らとの質疑応答が行われた。川崎病の歴史から疫学、診断や治療といった背景、論文の内容についての発表が行われた。論文のテーマが5歳以上の年長児の川崎病であることから、その特徴や問題点についても発表を行った。申請者は、研究発表を発表の前半は英語で後半は日本語で行った。

研究発表後、①5歳以降の川崎病の発生率が著しく減少することについての原因や日本人を含めたアジア人に多い理由、男女比などの病気の疫学的な背景、②年長児での診断や治療の遅れと難しさ、頸部リンパ節炎などとの鑑別を含めた診断の重要性、③重要な合併症である冠動脈疾患の診断や治療について、特に早期診断と治療の重要性、④再発例があることについての頻度や特徴などについての質問やコメントがなされた。申請者は、いずれも的確に回答した。さらに、川崎病は感染症が背景にあることは想定されているが発生原因や機序についてはいまだに不明であり原因究明や早期診断・治療にも今後の課題があること、愛媛県での状況や今後の対策、展望についても述べた。

審査委員は、申請者が本論文関連領域に対して学位授与に値する十分な見識と能力を有することを全員一致で確認し、本論文が学位に値すると判定した。